【B5】C++テクニカルセッション



# 今さら聞けない(?!)C/C++ポインタ一再入門

株式会社 日本情報システム 筑木真志

## アジェンダ



- "ポインタ"って何よ?
- メモリ&ポインタとの付き合いかた
- 解決法:Cの場合 ~ デバッグ用malloc
- 解決法: C++の場合 ~ スマートポインタ

# ポインタって、「難しい」よね...



- 抽象的
  - 「メモリを確保」するってなに?
- プログラムが落ちる
  - ポインタが絡むとプログラムが落ちる
  - バッファ・オーバーフロー

#### • 宣言の意味がわかりづらい

```
char **argv;
const char* const str;
char *ptr[20];
char (*ptr)[20];
int (*func)(const void*, const void*);
```



"ポインタ"って何よ?

#### ポインタとは



• ポインタは、他の変数のアドレスを持つ変数であり、Cで頻繁に使用される。

B.W.Kernighan, D.M.Ritchie著/石田晴久訳 プログラミング言語C 第2版 P113より

#### 変数とポインタ



```
#include <stdio.h>
#include <tchar.h>
int add(int a, int b);
int _tmain(int argc, _TCHAR* argv[])
   int a = 100;
   int b = 200;
   int c;
   int *d = &a; // 変数aがメモリのどこにあるか
   int *e = &b; // 変数bがメモリのどこにあるか
   int *f = &c; // 変数cがメモリのどこにあるか
   c = add(a, b);
   printf(_T("%d + %d = %d¥n"), a, b, c);
                 // なぜか、変数aの値が変わる
   *d = 300;
   *e = 400;
                 // なぜか、変数bの値が変わる
   c = add(a, b);
   printf( T("%d + %d = %dYn"), a, b, c);
   return 0;
int add(int a, int b)
   int ret;
   ret = a + b;
   return ret;
```

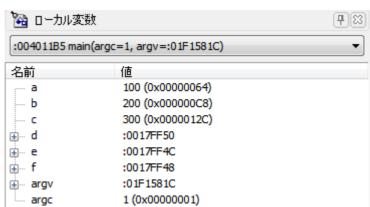
# 変数とポインタとメモリとアドレス



アドレス	変数(シンボル)	中身
0012FF3C	f	0x0012FF48
0012FF40	е	0x0012FF4C
0012FF44	d	0x0012FF50
0012FF48	С	300
0012FF4C	b	200
0012FF50	а	100

変数dの値 0x 0012FF50

変数aのアドレス 0x 0012FF50



# メモリ領域(Windowsの場合)



メモリ先頭

OS予約領域	
データ領域	スタック領域 (ローカル変数や関数の引数)
	ヒープ領域 (mallocやoperator newが「確保」する領域)
テキスト領域	実際に実行されるマシン語 (main関数、各種ライブラリなど)
BSS領域 (Block started by symbol)	定数
	初期化済み変数(静的/共通)
	未初期化変数(静的/共通)

メモリ終端

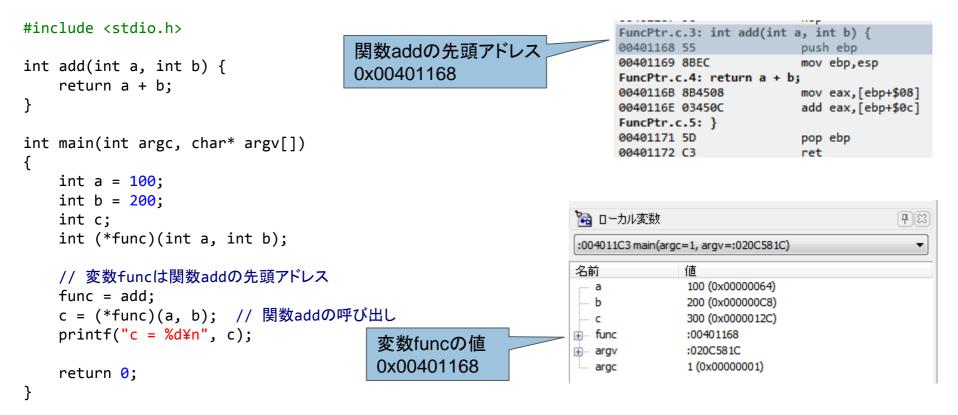
#### スタック領域とヒープ領域



- スタック領域
  - ローカル変数が格納される
  - 関数の引数が格納される
  - 関数が終了すれば自動的に解放する
- ・ヒープ領域
  - 関数malloc()が動的に確保する領域
  - operator newが動的に確保する領域
  - プログラマが自分で解放しなければならない



関数ポインタとは、メモリ(テキスト領域)に割り当てられた 関数の先頭アドレス





メモリ&ポインタとの付き合いかた

# お恥ずかしい話ですが...



```
#include <stdio.h>
#include <stdlib.h>
#include <memory.h>
#include <time.h>
int main(int argc, char* argv[])
    int i;
    char buff[9];
    char ch;
    memset(buff, 0, sizeof(buff));
    srand(time(NULL));
    for (i = 0; i < 16; ++i) {
      buff[i] = ((double)rand() / RAND_MAX) * ('z' - ' ') + '!';
    }
    printf("passwd = %s\u00e4n", buff);
    return 0;
```

# プログラムがクラッシュする原因



- 無効なメモリ領域へのアクセス
  - Segmentation fault
  - Bus error
  - NULLポインタへのアクセス
- バッファオーバーフロー/バッファオーバーラン
  - 想定したメモリ領域の前後を書き換えてしまう
    - 別のメモリ領域が書き換わる
    - メモリ領域に悪意のあるコードが書き込まれる
- メモリリーク
  - 使用済みメモリ領域が確保されたまま、再利用されない
    - 別の処理でメモリが確保できなくなり、アプリケーションやOSがクラッシュする



- C/C++の変数宣言は内から外へと解釈する
- C/C++の変数宣言は「置き換え」である

#### 例1) int \*val;

- → \*が付いている。すなわち、valはアドレスである。
- → \*vallはint型である。

変数vallはint型へのポインタである。

#### 例2) const char \*const str = "ABCDEFG";

- → strはconstである。すなわち、strの「中身」は変更出来ない。
- → \*が付いている。すなわち、strはアドレスを表している。
- → \*strはconst char型である。

変数strはReadOnlyな文字列定数でかつ、変更不可である。



- 例3) char \*ptr[20];
  - → []が付いている。すなわち、ptrは配列である。
  - → \*が付いている。すなわち、ptr[n] で表現するものはアドレスである。
  - → \*ptr[n] で表現するものはchar型である。

変数ptrは、char型へのポインタの配列である。

- 例4) char (\*ptr)[20];
  - → \*が付いている。すなわち、ptrの「中身」はアドレスである。
  - → []が付いている。すなわち、\*ptrは配列である
  - → (\*ptr)[n]はchar型である。

変数ptrはcharの配列へのポインタである。



● typedef宣言の使用

```
typedef char[20] MYBUFFER;
MYBUFFER* buffer;
buffer = (MYBUFFER *)malloc(sizeof(MYBUFFER)* count);
```

配列で置き換えられるのであれば、置き換える

```
char **foo; → char *foo[];
```



- 複雑なポインタ宣言は使わない!
  - 可読性、保守性の低下
  - Keep it Simple, Stupid!の原則
  - ポインタへのポインタへのポインタなんて、もってのほか!
    - もっと、別のシンプルな方法があるはず
- でも、やっぱり、ポインタ/メモリ管理は重要で、 どうしても逃げることは出来ない...



解決法:Cの場合 ~ デバッグ用malloc

#### mallocハック



- mallocハックとは、C標準のメモリ処理関数を「乗っ取る」
  - プリプロセッサでmalloc等を置換して、自前のmallocでメモリ領域を管理する。
  - リンク時にC標準ライブラリより前に、デバッグ用ライブラリをリンクする。
- mallocハックを使用したデバッグ用ライブラリ
  - mpatrol (<u>http://mpatrol.sourceforge.net/</u>)
  - ccmalloc(<u>http://cs.ecs.baylor.edu/~donahoo/tools/ccmalloc/</u>)
    - malloc等が呼び出された時のログを作成する
    - ただし、C++Builderでは使えない

#### mallocハック



ガベージコレクションライブラリ Boehm GC

(http://www.hpl.hp.com/personal/Hans\_Boehm/gc/)

- ガベージコレクションを実装したmalloc
- mallocで確保した領域が「不要」になれば自動的に解放
- ポインタと見なせるメモリイメージより、メモリの使用状態を判別
- mallocの代替として使用可能

#### Boehm GCの例



```
#include <stdio.h>
#include "include/gc.h"
#pragma link "gc.lib"
typedef struct Tree tag {
  struct _Tree_tag* left;
  struct Tree tag* right;
} Tree;
Tree* generate tree(int level) {
  if( level > 0 ){
    Tree* new tree =
        (Tree*)GC malloc(sizeof(Tree));
    new tree->left = generate tree(level-1);
    new tree->right = generate tree(level-1);
    return new tree;
  } else {
    return (Tree*)0;
```

```
int main(int argc, char** argv)
  int i;
  for(i = 0; i < 100; i + +){
    Tree* root :
    printf("GC get heap size: %ld\u00e4n",
        GC get heap size() );
    printf("GC get free bytes: %ld\u00e4n",
        GC get free bytes() );
    printf("GC get bytes since gc: %ld\u00e4n",
        GC get bytes since gc() );
    printf("GC get total bytes: %ld\u00e4n",
        GC get total bytes());
    root = generate tree(20);
    printf("GC counts: %d\u00e4n", GC gc no );
  return 0;
```



解決法: C++の場合 ~ スマートポインタ

## C++でメモリリーク等を回避するには



- STL(Standard Template Library)の使用
  - 可変長配列(std:: vector)、リスト(std::list)、連想配列(std::map)など
  - STL内部でメモリ領域の管理を行っている
- スマートポインタの使用
  - 自動的にメモリ領域の解放を行う
  - 挙動によりいくつか種類がある
- その結果、ソースコード中でメモリ領域の管理が不要になる

# なぜ、スマートポインタなのか



```
void fastcall TForm1::Button1Click(TObject *Sender)
   // スマートポインタにしてみる
   std::unique ptr<TStringList> pList(new TStringList());
   // アクセスは変わらない
   pList->LoadFromFile("DATA.TXT");
   for (int i = 0; i < pList->Count; ++i) {
       // 何らかの処理
       foo(pList->Strings[i]);
   // スマートポインタなので、pListが持っていたメモリ領域は自動的に解放される
void fastcall TForm1::foo(UnicodeString us)
   throw Exception("何らかのエラー");
```

#### スマートポインタとは



- 自動的にメモリ領域の開放を行うポインタ
  - std::unique\_ptr / boost::scoped\_ptr
    - 参照されなくなったら、メモリ領域を解放する
  - boost:: shared\_ptr (std::tr1::shared\_ptr)
    - 参照カウンタ付きポインタ
    - 参照カウンタが0になったらメモリ領域を解放する
  - boost:: weak\_ptr (std:: tr1:: weak\_ptr)
    - std::shared\_ptrの参照カウンタを変化させない
  - boost:: intrusive\_ptr
    - 自前で参照カウンタを管理をする

#### unique\_ptr



- unique\_ptrは参照されなくなったら、自動的にメモリを解放する
  - 従来のauto\_ptrは非推奨(deprecated)となる
  - 代入が出来ない
  - 想定する使い方
    - VCLクラスを使用する場合
    - pimplイディオムを実装する ヘッダファイルにインターフェースだけ用意して、実装は別のクラスで行う
    - Singletonパターンの実装



# Singletonパターン:1つのオブジェクトしか存在しない

```
#include <memory>
#include <vcl.h>
class COption
public:
  static COption& COption::getInstance();
private:
  static std::unique ptr<COption> s pInstance;
};
std::unique ptr<COption> COption::s pInstance(NULL);
COption& COption::getInstance()
 if (s pInstance.get() == NULL) {
   // Double-Checkd Lockingイディオム
    std::unique ptr<TCriticalSection> pCriticalSection(new TCriticalSection);
   pCriticalSection->Enter();
   // CriticalSectionの生成中に別スレッドで初期化されているかもしれないので、再チェック
   if (s_pInstance.get() == NULL) {
       s pInstance.reset(new COption());
   pCriticalSection->Release();
  return *s_pInstance;
```

## shared\_ptr / weak\_ptr



- shared\_ptrはポインタの参照カウントを数える
  - 代入で参照カウントを増やす
  - 破棄で参照カウントを減らす
  - shared\_ptr同士で循環参照した場合は正しくメモリが解放されない。
    - その場合は、weak\_ptrを使用する
- weak\_ptrはshared\_ptrの参照カウントを変化させない
  - shared\_ptrの「本体」が有効か無効かがチェックできる

# shared\_ptrの例(ファクトリパターン)



- ファクトリパターン(仮想コンストラクタ)
  - 基本となる共通の手続き(インターフェース)を基底クラスに用意
  - 基底クラスを継承したクラスで、おのおのの振る舞いを実装する

```
#include <vector>
#include <boost/shared ptr.hpp>
#include <boost/foreach.hpp>
#include <tchar.h>
// 図形要素基底クラス
class CPrimitiveBase
protected:
       CPrimitiveBase(){}
        CPrimitiveBase(const CPrimitiveBase& Primitive);
public:
       virtual ~CPrimitiveBase() {}
        virtual void draw() const = 0;
                                                     // 描画
};
typedef boost::shared ptr<CPrimitiveBase> CPrimitive;
typedef std::vector<CPrimitive> CPrimitiveArray;
```

## shared\_ptrの例



```
// 図形要素:直線
class CPrimitiveLine : public CPrimitiveBase
protected:
 // 通常のコンストラクタは隠蔽する
 CPrimitiveLine() {}
 CPrimitiveLine(const CPrimitiveLine& Primitive) {}
public:
 virtual ~CPrimitiveLine() {}
    static CPrimitive create() {
      return CPrimitive(new CPrimitiveLine());
 virtual void draw() const {printf("line\u00ean");}
};
// 図形要素:文字列
class CPrimitiveText : public CPrimitiveBase
protected:
 // 通常のコンストラクタは隠蔽する
 CPrimitiveText() {}
 CPrimitiveText(const CPrimitiveText& Primitive) {}
public:
 virtual ~CPrimitiveText() {}
  static CPrimitive create() {
    return CPrimitive(new CPrimitiveText());
 virtual void draw() const {printf("text\u00e4n");}
};
```

```
// 図形要素の追加
void addPrimitive(CPrimitiveArray& arr)
 // 直線オブジェクトの生成
 arr.push back(CPrimitiveLine::create());
 // 文字列オブジェクトの生成
 arr.push back(CPrimitiveText::create());
// 図形要素の描画
void drawPrimitive(CPrimitiveArray& arr)
 BOOST_FOREACH(CPrimitive& e, arr) {
   // 格納されている図形オブジェクトを描画する
   e->draw();
}
int _tmain(int argc, _TCHAR* argv[])
 CPrimitiveArray arr;
 addPrimitive(arr);
 drawPrimitive(arr);
 return 0;
```

#### intrusive\_ptr



- intrusive\_ptrは自前でポインタの参照回数を管理する
  - 代入で関数intrusive\_ptr\_add\_ref()が呼ばれる
  - 破棄で関数intrusive\_ptr\_release()が呼ばれる
  - COMオブジェクトの管理に有用

```
class MyClass
{
public:
    MyClass();
    virtual ~MyClass();
public:
    void addref();
    void release();
};

void intrusive_ptr_add_ref(MyClass* p) { p->addref(); }
void intrusive_ptr_release(MyClass* p) { p->release(); }

int _tmain(int argc, _TCHAR* argv[])
{
    boost::intrusive_ptr<MyClass> ptr(new MyClass());
    return 0;
}
```



まとめ



- はっきり言って、ポインタは「怖く」ない!
  - 積極的にプログラムを「クラッシュ」させてみてください。
  - デバッガでプログラムを追っかけてみてください。
- でも、「生ポインタ」の使用は控えめに…



# ご静聴ありがとうございました!!